
エターナルウィザース

爆炎王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エターナルウィザーズ

【Nコード】

N0074T

【作者名】

爆炎王

【あらすじ】

過激化するネウロイの侵攻に対し、人類は一つの邪法を見出す。それはネウロイのコアを人体に移植、仮初の魔力によって空を翔るのだという。

男たちの参戦によって戦局は好転しつつあった。だが――。

ブローグ

「総員！ ネウロイ化開始！」

緑のベレー帽を被り、軍服が豊かな筋肉で盛り上がった男は俺たちの前でなる。

俺は胸の真中にある紅いコアに触れて『魔法の言葉』を吐いた。

「我が身は鋼。我が心は剣。我が意思は爆炎。我が名はレヴァンテイン」

俺の足元に紅い光が走り、互いに交じり合い、複雑な図形となり、魔法陣として意味をなした。

同時に俺の皮膚に異変が起こる。赤と黒の装甲が浮き上がり、それはほぼ全身に行き渡った。効果は腰間に吊るされた一・五mほどの両手剣にも及び、赤と黒に染まりあがる。

俺の隣に並んでいる連中も赤と黒の装甲、つまりネウロイ化が始まっていた。

特に脚部の強化は著しく、正しくストライカーユニットを履いた様な形状になっている。

「全員ネウロイ化終了しました」

「出撃と同時に多方に散開し、ネウロイどもの侵攻を食い止める。俺からは以上だ。幸運を祈る」

矢継ぎ早に言い残してベレー帽の男——榎原隊長は滑走路から飛び出していった。それに続いて次々と戦友たちが発進していく。

俺も脚部に軽く力を入れて、点火、急加速するがGは感じない。ネウロイ化したら痛覚は麻痺し、変わりに視覚が全方位となるのだ。

「報告の通り、か」

ハンガーを抜け、外に出た。空はおびただしいまでのネウロイに支配されていた。既に飛び立った仲間たちとネウロイのレーザーが激しく飛び交い、怒号と剣戟が響き渡る。

砕け散るネウロイの破片と戦友の肉片がバラバラと散っていた。魔女はシールドを展開できる。故に生存率が高い。だが俺たちが得た仮初の魔力ではシールドは張れない。故に、生存率は1%にも満たない。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

俺は両手剣を抜き放ち、飛翔する。空をグングンと駆け上り、高空にいる大型のネウロイを狙う。

接近に気付いたネウロイが紅いレーザーをいつせいに放ってくる。視界を埋め尽くす真紅の弾幕を、俺は瞥見して両手剣ツヴァイハンダーを大上段に構えた。

「燃え上がれ！！」

ツヴァイハンダーの刀身を炎が這う。紅く燃え滾り、大きく振りがぶった。

「イグニート・ダートオッ！！」

灼熱の火炎が空を走り、前方に燃え広がっていった。

刹那、眼を焼く白色の光と耳を劈く爆音、そして凄まじい大爆発に吞まれた。

プロローグ（後書き）

ほぼオリジナルストーリーです。

ISやソニックダイバーも兵器として登場するので、一応原作に入
れておきました。

主人公紹介（前書き）

ネタバレはないと思います。

こっちはそういうのは自重したいと思います。

主人公紹介

沢村（本名、名前共に不明） 男 ? 歳

階級 二等兵

所属 第777多国籍特殊戦闘航空団（通称エターナルウィザーズ）
国籍 扶桑皇国

武器 ツヴァイハンダー

武装 貫通性反射レーザー砲

魔法 炎系統の攻撃魔法

D・ストライカーユニット 焰零式

ネウロイと最前線で戦う特殊戦闘チーム、エターナルウィザーズの戦士。

ネウロイ化で得られる力は炎。剣術も得手なので魔法と併用して戦うことができる。

稀に見る熱血漢で正義感溢れる若者。戦闘技術は荒削りだが、将来はそれなりに期待されている。

過去にまつわる情報は出生も含めて一切が不明。

火炎八倒剣術の使い手。

術技

イグニート・ダート：刀身に炎を発現、薙ぎ払い、周辺への敵に対して広範囲攻撃を行う。

ファイアボール：自分の周囲に火球を作り、対象に向けて飛ばす。

炎剣・抜：剣を炎に宿す。始まりの技。

炎剣・砕：炎の剣で砕く。次への布石。

炎剣・噸：鋭く重い一撃。更なる連携へ。

炎剣・克：炎は水をも焼き尽くす。

炎剣・毅：不動の構えから放たれる一撃は無双。

炎剣・龍：そして全ては炎へ。

反撃の狼煙（前書き）

守りてえモンがあるから、俺は死を超えられる。

反撃の狼煙

今日、またホームベースの共同墓地に三人のウィザードが葬られた。

移植したコアをネウロイのレーザーで貫かれ、即死だったそうだが、ウィザードはネウロイ化することでウィッチを凌駕する魔力と機動力を得るが、ただ一つの致命的な弱点があった。

俺は胸に移植したコアを服の上から触りながら新しく造られた墓の前に立ち、黙祷する。

エナジー。

第二の心臓。

ウィザードの中核。

N・サーキット。

様々な呼び名が、俺は単純にコアと称している。ウィザードにとってコアは決して失ってはならない部位だ。もし失えば――。

「沢村。ここにいたのか」

「坂本さん」

坂本庄司。階級は少佐。戦闘スタイルは俺と同じ近接戦闘特化型で、3mにも及ぶ長大な日本刀物干し竿を自分の手足のように振るう。

今年50歳になると聞いたが絶対に嘘だ。訓練でも一度も勝った事がない。コアは右眼に移植、普段は眼帯で隠されている。

「今週でもう22人目つすよ。しかも全員、新米魔法使いつす。扶桑7人、リベリオン3人、カールスラント4人、スオムス1人、ロマーニヤ3人、ガリア1人、ブリタニア3人。もちろん、墓なんて見せかけつす。コアをぶつ壊されちまえばネウロイと同じく跡形も

なく砕け散りますからね」

コアを失えば、ネウロイと同様に砕ける。死体すら残らない。
それがウィザードの末路だ。

「先ほど、本国から入電があつてな。上層部は北部戦線を見限るよ
うだ。既に後陣の航空団は退却を始めた」

「どういことですか、それ」

「第776特殊工作部隊^{リトルウィザーズ}、第773特殊戦闘兵団^{クライシスウィザーズ}がネウロイとの交
戦で壊滅、第771白兵航空団^{ゼルセンウィザーズ}は半壊した。北部戦線で耐え抜いて
いるのは我々だけだ」

俺は唇を噛み締め、拳をきつく閉じる。

戦局は火を見るよりも明らかに、悪化している。一時はネウロイ
を北方に追いやり、勝利が目前に迫っていた。
だが。

あの事件で戦局は一気に覆され、ウィザード参戦前よりも更に厳
しい状況下に陥っていた。

「もうウィザードは投入されない。だが通常兵器ではネウロイは倒
せず、ウィッチたちの数はもはや数える程度にしか残っていないの
だ」

俺は少佐が言いたい事が分かった。人類は最後の反撃に転じる。

「核兵器の使用がサミットで決定した。今から一週間以内に北部を
中心に核の雨が降り注ぐ」

「分かてるんすかね。使えば、全土が汚染されますよ。ネウロイ
によって支配された街よりもヤバくなるんですよ」

「生き残る為だ」

俺は顔をゆがめた。

核兵器を持ち出して、何が生き残る為だ。全てを吹き飛ばし、破壊しつつ兵器で平和を作る？

ふざけんな。俺はそんなモンに頼る為にウィザードになったんじゃない。

「一週間、いや五日以内に北方を奪還します。そうすれば頭の悪い連中も黙るでしょう」

「軍の命令に齒向かう気か？」

「今日までに何回、背いたと思ってるんですか。どうせ俺らはバケモンです。命令無視など上も重々、覚悟してるんじゃないんすかね」

「はっはっは。お前も中々、肝が据わってきたな！ よし、作戦会議室に行くぞ」

俺は少佐と一緒に作戦会議室に向かった。

歩きながら俺は見慣れた基地内を見回す。度重なる激戦であちこちが罅割れ、薄汚れ、壊れ、さびついていた。通路には壊れた銃器やガラクタなどが散乱し、廃墟同然である。

生き残ったメンバーは結局、初期の11人だけ。1%にも満たない生存率の中で生を見出せたのは俺たちだけだった。

沢村^{おれ}。訳アリで年齢不詳。

坂本庄司。49歳。

アダム・デイトリンデ・ヴィルケ。38歳。

ディエゴ・ビショップ。47歳。

シャッセール・クロステルマン。44歳。

ブルーノ・ハルトマン。49歳。

ヒエロニウムス・バルクホルン。56歳。

クラウディオ・ルツキーニ。40歳。

イーノック・G・イエーガー。33歳。

ドガエフ・A・リトヴァク。44歳。

ヤンネ・イルマタル・ユーティライネン。44歳。

戦い抜いた11人の戦士。

あの、伝説の魔女たち——第501統合戦闘航空団——ストライクウィッチーズの名を受け継ぐ男たちだ。

反撃の狼煙（後書き）

主人公以外の名前は原作からもじってます。まあ、原作も実在の名前からきてるんですけどね。

代償（前書き）

この世界は、あまりにも壊れていた。

代償

作戦会議室の両開きのドアを坂本が開ける。

円卓とホワイトボードしかない殺風景な部屋にはヒエロニムス・バルクホルンしかいなかった。

きつちりと揃えた黒の短髪、しわ一つ汚れ一つない新品のようなカールスラント軍服を着こなしている。

見た目の通り、生真面目でルールにうるさいやつだ。

「おや、他のメンバーはどうした？」

「好き勝手にうろついている。まったく、ナイトウィザードのドガエフなら分かるが、全然緊張感というものが――」

ほら、始まった。真面目なのはいいけど、何事も限度って物があるだろ。

「そうか。ならお前から伝えてくれ。我々は五日以内に北方を奪還するとな」

「ああ、構わないが――！？　今、なんと？」

「北方を奪還する」

「な、何を！　軍の命令は退却ではないか！」

「ネウロイの巢を目前にして、逃げるのも癪に障るだろう？　それに軍規違反は我々の十八番じゃないか」

「し、しかし！　その軍規違反が謀反にされなかったのも我等の活躍があつてこそであり、もし北方のネウロイの巢を陥落できなければ！」

「陥落できなければどっちにしろ私たちは死ぬさ……時間は残っていない」

坂本の言葉にヒエロニウムスは押し黙る。俺は舌打ちをした。

「分かった。細かい作戦内容は？」

「今夜、ここで取り決める。時間は午後八時。夜間偵察は中止だ」

ヒエロニウムスは頷いて作戦会議室から出て行く。去り際に俺を一瞥して、

「相変わらず、無茶な作戦を考える男だ」

「無茶はお互い様だろ」

そう吐き捨てていった。

「お見通しだったな。私はこの作戦を言い出したのはお前だとは一言も言っていないのに」

「長い付き合いっす、知らねえことなんか何も無いんすよ」

俺は円卓に座り、窓の外を見る。

泣き出しそうな曇天が延々と広がっていた。

「あと、どれくらいっすか。俺たちが翔べるのは」

「これまでの統計によれば合計で700回前後、ネウロイ化をする
とコアに全身を侵食され、ネウロイそのものになってしまうようだ。

アサルトウィザース

第779駆逐航空団はそれが原因で自滅した。ネウロイとなつてしまったら自我を失い、全てを壊す。二度と元には戻らない」

「皮肉なもんですね。力を求め、空を目指したのに結局は力に吞まれて守るうとしたものを自らの手で破壊してしまう」

「いや、これは当然の報いなのだろう。人でもネウロイでもない我らウィザードに与えられた罰……」

俺は胸にあるコアに触る。冷たい、無機質な感触がした。

あの事件。ネウロイを北方に追い込んだ、最後となる筈だった戦い。

全ウィザードを結集して挑んだ。

勝てる戦いだった。勝てる筈だったんだ。

だけど。

俺たちは負けた。コアに侵食され、大半のウィザードが墮したのだ。当時、何も知らなかった俺たちは不意を衝かれて全滅寸前にまれ、しかし坂本を筆頭とした第777多国籍特殊戦闘航空団の奮戦によって危機を脱した。

しかし戦力は激減し、軍部はウィザードを危険視してウィザーズ・プロジェクトは打ち切られた。残されたウィザードたちは、勝利の見えない激戦の渦中に果てていった。

「私たちは既に600回以上、ネウロイ化している。そろそろ覚悟しておくべきだろう」

「そうっすね。そんな時は介錯、頼みますわ。ネウロイになるくらいならまだ、人としての心があるうちに、って人じゃなかったすね俺ら」

「もしかしたら私が先になるかもしれないぞ？」

坂本は俺を見ながらニヤツと笑った。

そのとおりだ。俺たちの中で誰が最初に死ぬかなんて、予想できない。ネウロイになる回数は700回とされているがブレもある。

800回もネウロイ化し、未だに戦っているウィザードだっている。

「あんまり先のことは考えるなよ。その時が来るまで我々は共に生き、戦う。青き空を取り戻すまでな」

坂本は俺の肩を軽く叩いて退室した。

一人になった俺は自分の手を見つめる。押し殺していた死への恐怖がドツと溢れてきた。

痙攣する手を抑えて俺は蹲った。

「……クソ……死にたくねえよ」

最終決戦まで後、五日。

用語解説

『コア』

ネウロイの中核。これを男に移植することで仮初の魔力を得られる。様々な呼び名がある。

『ウィザード』

ネウロイのコアを人体移植した男たちの総称。弱点はネウロイと同様、コアである。破壊されれば跡形も残らずに消し飛ぶ。ウィッチのようにシールドは張れない。

『ネウロイ化』

コアの力を解放し、全身にネウロイと同質の装甲を纏う。超速再生能力に加え、属性が付与された魔法を使えるようになる。また、単純なレベルではウィッチを上回る。

『D・ストライカーユニット』

ダーク・ストライカーユニット。ネウロイ化は特に脚部の強化が著しく、ウィッチのストライカーユニットよりも高性能かつ高出力のユニットを自動で構築する。

種類によって性能は異なるが、限界高度は確認されている全機種共に測定不能となっている。宇宙での戦闘も可能といわれている。

『ウィザーズ・プロジェクト』

ウィザードを量産する計画。これによって一時期は、ネウロイを北方に追いやるほどの戦力にまで膨れ上がった。

『あの事件』

人類が大敗退した戦いの事を指す。ネウロイ殲滅を目前に迫るもウ

イザードの完全ネウロイ化によって反撃を喰らい、主力艦隊や航空団が全滅した。

ウィザードの危険性を思い知らされ、人類の戦力は激減し、ウィザーズ・プロジェクトは打ち切られた。

『完全ネウロイ化』

コアに全身を侵食されて人格を失ったウィザードの成れの果て。敵味方問わず無差別攻撃を行い、全てを破壊しつくす。

一度、完全にネウロイとなってしまったら助ける術はなく、コアを破壊するしかない。

——ウィザード航空団一覧——

第771 白兵航空団 ゼルセンウィザーズ 北部戦線防衛の戦いで半壊。軍としての機能は失っている。

第772 遊撃隊 ミステイスウィザーズ 扶桑皇国にて防衛戦を展開。劣勢とあり。救援を要請。

第773 特殊戦闘兵团 クライシスウィザーズ 北部地上戦にてネウロイと交戦し、全滅した模様。

第774 魔法戦術航空団 ウィズダムウィザーズ 北方に向け行軍中、消息を絶つ。

第775 特別攻撃航空隊 レイジングウィザーズ 大敗退戦にて全滅。

第776 特殊工作部隊 リトルウィザーズ 北部戦線にて全滅。

第777多国籍特殊戦闘航空団 エターナルウィザース 北部戦線を防衛。航空団の中でも最高クラスのウィザードが集う多国籍軍。

第778防衛航空団 ガーディオンウィザース 大敗退戦にて全滅。

第779駆逐航空団 アサルトウィザース 完全ネウロイ化による
同士討ちで全滅。

D・ストライカー一覧

焰零式 沢村の専用機。機動力、加速性共にトップクラス。防御力は紙。炎を宿す事ができる。

暁・鬼殺し 坂本の専用機。高い機動力を誇り、自由自在に大空を駆け巡る。

ヴァイゲルング アダム専用機。バランスタイプであらゆる状況に対応できる。

アルティスタ デイエゴ専用機。大型で、巨大な銃器の反動にも耐える。防御力も高い。

リム・オングル シャッセールの専用機。電気を帯びた特殊な飛行を見せる。

ウン・ヴェッター ブルーノの専用機。烈風を従わせたその動きは沢村の焰零式を超える。

アオゲン・ブリック ヒエロニムスの専用機。エンジンの馬力は最高クラス。大型の武器をいくつも携行できる。

フィ・アンマ クラウディオの専用機。突進能力に秀でている。自らの肉体を生かした体当たりは下手な武器よりも強い。

シューティングスター イーノックの専用機。加速性、最高速度はウィザーズ最速。ひとたび、光速の世界にはいれば何者も彼に追隨する事はできないだろう。

クールトウカ ドガエフの専用機。夜間飛行用のため、見つかりにくい漆黒のカラーリングが施されている。

オタヴァ ヤンネの専用機。予測のできないトリッキーでクセの強いタイプ。ヤンネだからこそ使いこなせる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0074t/>

エターナルウィザース

2011年11月12日15時33分発行